

研究主題 [生きる力]を高める家庭科の授業のあり方

- 体験的な学習活動を通して生徒が学び合う姿を求めて -

要約：今まで家庭科の授業で取り入れられてきた体験的な学習活動の中に、学び合うための学習指導の工夫（ジグソー学習による学習形態、学びが見える学習環境）を取り入れることによって、生徒は学び合いを深めることができる。このような工夫が、意欲を高め、実生活に役立てようとする態度につながる。

1 主題設定の理由

最近、生活経験に乏しく、ものを作ることを面倒だと考える生徒が増えてきた。また、生徒は分からないことがあると教師の所に個々に質問しに来て、生徒同士で学び合いが行われなくなっている。グループ活動でも協力して課題を解決するのではなく、一部の生徒だけの活動になることもあり、以前ほど話し合いが深まらない。

「家庭科で育つ子どもたちの力（日本家庭科教育学会編、2004）は、この原因を、「核家族化の進展、家族のあり方の多様化、便利な道具の普及が子どもたちの成長・発達に多大な影響を及ぼし、その結果、家庭や社会は、子どもの人とかかわる力を弱め、生活技能も低下させている。」と指摘している。

子どもの変容は、物質的には豊かな社会の中で、何でも手に入る状況であるために、自らの手で新しいものを作り上げる体験が少ないことが大きく関わっていると考えられる。

現行の学習指導要領では、生徒一人一人が基礎基本を確実に身につけるとともに、自ら学び考えるなどの「生きる力」を育成することをねらいとしている。中学校技術・家庭科という「生きる力」とは生活に必要な知識と技術を身につけ、自分の生活の課題を主体的に解決し、生活をよりよく創造していく力である。さらに「生きる力」を育成するためには、体験的な学習活動を通して学ぶことを、より一層充実させることが求められている。それは、体験的な学習活動の大きな意義である「五感による認識で事物の本旨本質に迫れる」「集団的な性格から協同の力が身につく」（山崎、2003）といったことが、生活の自立を促し、周りの人とかかわる力をつけていくことにつながると考えられるからである。

中学校技術・家庭科 家庭分野（以下、家庭科という）ではこれまでも多くの体験的な学習活動（調理や製作実習、実験・観察、見学、調査・研究等）が行われてきた。これらを見直し、そこで行われる学び合いの方法を工夫することで、一人一人が人とかかわりを楽しみ、達成感が味わえる学習活動ができると考えた。

人は人の中で育ち、人とかかわりの中で生活するものである。まねたり、教えられたり、ほめられ

たりすることで学びが深まり意欲も高まる。そこで、活動の中で学び合う場や、教師の支援方法を工夫し、授業実践によって検証することとした。

2 研究の目的

体験的な学習活動の中に、学び合う場面を工夫し、積極的に取り入れることが生徒の意欲を高め、実生活に役立てようとする態度の育成につながることを明らかにし、今後の授業改善の資料を得ることを目的とする。

3 研究の方法

- (1) 授業実践の参考にするために、生徒に対し実態調査を実施する。
- (2) 文献等から学び合いの実例を抽出し、本研究の対象生徒に合う方法について検討する。
- (3) 体験的な学習活動の中で、学び合いを有効に進めるための手だてを工夫し、それを取り入れた題材の指導および評価計画を立案する。
- (4) 授業実践により、生徒のふり返りカードや実践レポート等で意欲の高まりを検証・考察する。

4 研究の内容および結果

(1) 生徒の実態

家庭科の学習に対する興味や関心についての生徒の意識や、家庭での生活経験の実態を把握し、中学校でどのように授業を進めていけばいいかを考えるために、平成 16 年度中学に入学したばかりの 1 年生を対象者としたアンケートを実施した。その結果から次のことが分かった。

生徒は家庭科(調査結果では小学校の家庭科をいう)が好きである。特に、調理実習や製作実習といった活動を伴う学習活動が好きである。家庭科の学習活動の中で、友達と協力できた、夢中になれた、できなかったことができるようになった活動が好きだと考えている。(図1) 生徒は家庭科の学習は必要な学習であり、将来役に立つと考えている。生徒は、家庭で毎日行う自分の仕事があまりなく、生活経験も不足している。

これらの結果から、中学校の家庭科で、ものづくりや体験的な学習活動、そしてグループで協力できる活動の場を積極的に取り入れていくことが学習意欲を高めることにつながると再認識した。

さらに、生活の中で実践しやすい内容を題材として設定すれば、主体的に生活を営もうとする態度の育成につながると考えた。

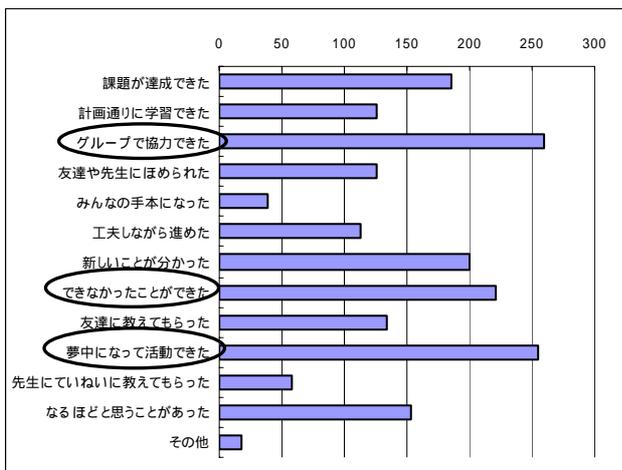


図1 家庭科の学習で楽しかったこと

(2) 学びの場面でのジグソー学習

昨年度の自分が作成し実施した年間学習指導計画では、1～3年まで、多くの体験的な学習活動を取り入れ授業を行っている。

そこで新たに体験的な学習活動を増やすよりも、今までをふり返り、活動の場を工夫し学び合いが深まる方法を検討することにした。

例を挙げると、グループでの献立作成、調べ学習、類似体験(ロールプレイング)活動において、話し合いや意見を出し合う活動がうまく進まない状況があった。これらの活動では、お互いの意見が出てこそ学びが深まる。そこで、その活動に工夫を加えることにした。まず、学び合うイメージを次のように考えた。(図2)

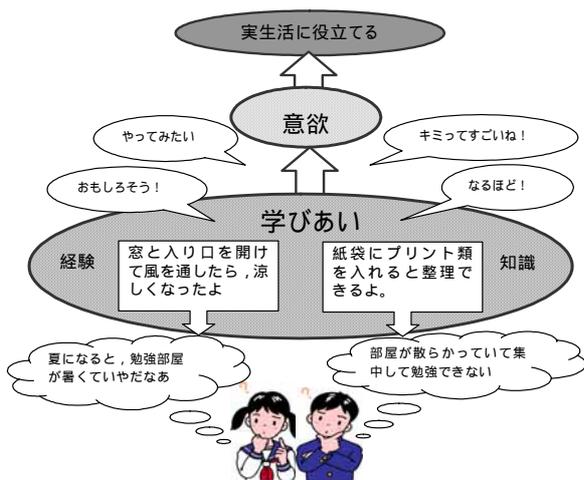


図2 学び合いのイメージ

- 一人一人生活の中で体験していることには違いがあり、習得している知識や技能にも差がある。
- お互いの思いや願いを知ることで新しい気づきにつながる。

つまり、グループ活動の友達とのかかわりで「すごいね」「なるほど」とお互いを認めあうことが学び

意欲につながり、生徒の実践的態度になると捉えた。

この課題を解決する手がかりとして、ジグソー学習の手法を取り入れることとした。筒井昌博ら(1999)はその学習方法を次のように紹介している。

ジグソー学習とは、E・アロンソンらによって提唱された小集団学習の方法であり、協同的な雰囲気の中で仲間同士が教えあうものである。ジグソー学習は、すべての子どもが発表者となるので、表現力や思考力を高めることができ、発展的指導には有効である。

ジグソー学習は、問題解決型学習の学習形態のひとつであるが、特徴としてあげられている「仲間同士で教えあう」「すべての子どもが発表者になる」というところに関心を持った。自分が学んだことを人に伝える、そして友達からも学ぶ方法として有効ではないかと考えたからである。

調べ学習の中で、課題をクラスで分担し、一人では調べきれない内容も調査班で協力して調べまとめる。その後、学習班に分かれ各自が責任を持って調べたことを発表するというジグソー学習の形態を利用し授業の展開を考えることとした。(図3)

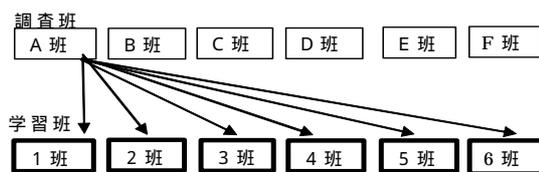


図3 ジグソー学習のグループ編成

(3) 授業実践

指導および評価計画

ア 題材名 A生活の自立と衣食住
「快適に暮らすために」

イ 目標

- 住居の働きを理解する。
- 問題解決型学習を通して、家族が住まう空間としての住居の機能や、安全で快適な室内空間の整え方を知り、よりよい住まい方の工夫ができる。

ウ 生徒の実態

実態調査の結果

より、食物などの学習に比べると、住まいの学習には興味のない生徒が多いことがわかる。(図4)

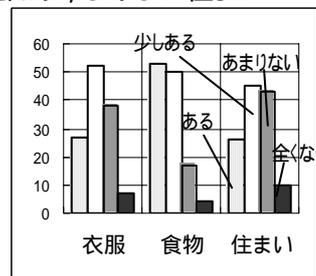


図4 家庭科の学習に対する興味

エ 指導計画(全8時間)

- 住まいの機能について考えよう・・・1時間
- 快適な住まいってどんな住まい・・・6時間



- 自分にもできる住まいの工夫・・・1時間

オ 評価規準と評価の方法

表1 評価規準(住まい)

関心・意欲・態度	創意工夫	生活の技能	知識・理解
安全で快適な室内環境の整備と住まい方について関心を持って学習に取り組む、住生活をより良くしようとしている。	安全で快適な室内環境の整備と住まい方について課題を見つけ、その課題を解決しようとしている。	安全で快適な室内環境の整備と住まい方の工夫に必要な基礎的な技術を身につけている。	安全で快適な室内環境の整備と住まい方の工夫に必要な基礎的な知識を身につけている。

評価方法

- 1) 授業観察(座席表, クラス名簿の利用)
- 2) 学習プリント, ふり返しカードの点検
- 3) 自己評価カード, 相互評価カードの点検
- 4) 個人レポート, 実践レポートの点検
- 5) 小テスト

学習指導の工夫

問題解決型学習で取り入れた学び合いの場の工夫

- ア 快適を考える場面でのカード分類
- イ ジグソー学習を取り入れた調べ学習と発表
- ウ 報告会での相互評価活動

実生活に役立てるヒントにするための体験活動

- ア 段ボールで作ったドームの換気体験
- イ 窓に貼ったビニールひもで風の動きを見る実験
- ウ 簡単にできる机の汚れ落とし体験

授業の結果

視点: 調べ学習に学び合う活動を工夫したことで意欲が高まり実生活に役立てる態度になったか。

ア カード分類

「快適とはどんなことか」について意見を出し合う時、自分の意見をカードに書いてから、各班で分類し意見をまとめさせた。話し合う前にまず自分の意見を持たせたことから全員が参加した話し合いとなり、班活動を活性化させることができた。

また、他の人の意見から新しい考えを見つけることができた生徒がほとんどであり、(図5)以後の学習の見通しを持たせることができた。

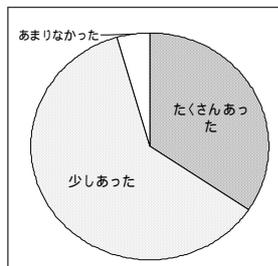
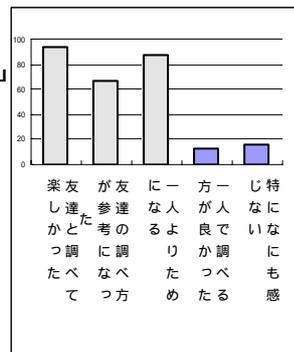


図5 新しい気づきはあったか

イ ジグソー学習

調査班で、「快適な住まい」の室内環境について内容を6つに分け、班ごとに分担して調べた。

インターネットや住まいに関する本を使って、班員同士協力して調べたり、アンケート調査を行うなど生徒は意欲的に活動していた。図6 グループ学習は良かったか授業のふり返しカードによると「グループで調べ、学習をした方が一人より活動は楽しく、ためになる」



と答えており、活動は有効であったといえる。(図6)

次に学習班に分かれ、班員がそれぞれ調べた内容を発表し合う活動では、「うまく報告できて達成感を味わった」と答える生徒がほとんどであった。

さらに、ジグソー学習で調べた後、学習を生かして自分の家で実践したことを報告する課題に、発表や体験した内容が多く見られ、学習したことを工夫して実生活に役立てていることがわかる。

・僕は、換気しながら勉強をした。窓を閉めてするより換気した方が集中して勉強ができた。
 ・窓を開け、換気しながら掃除機で部屋のすみずみまで掃除した。そしたらとても気持ちよくなった。(生徒の感想)

(4) 授業実践

指導および評価計画

ア 題材名 B 家族と家庭生活

「幼児と触れ合おう、よく知ろう」

イ 目標

- ・自分の成長について考えることができる。
- ・調べ学習を通して、幼児の心身の発達の特徴を理解する。
- ・家族や周りの大人の役割について考え、これからの自分について考えることができる。

ウ 生徒の実態

「幼児が好きですか」

という問いに対して、「好き」と答えたのは女子が8割、男子は4割で、男子は保育学習に対する興味も低い。



図7 幼児のイメージ

幼児のイメージも、「かわいい」、「泣く」、「元気」などで広がりを感じられない。(図7)

エ 指導計画(全12時間)

- 1) 中学生になるまで … 1時間
- 2) 幼児と触れ合う … 4時間

(保育園訪問体験)

- 3) 幼児をよく知ろう … 5時間

調べ学習 → 発表

ジグソー学習を利用したグループ学習

- 4) 子どもと家族のかかわり … 2時間

オ 評価規準

表2 評価規準(中学生になるまで)

関心・意欲・態度	創意工夫	生活の技能	知識・理解
自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて関心を持ち、学習活動に取り組んでいる。			自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて理解している。

表3 評価規準(幼児の発達と家族)

関心・意欲・態度	創意工夫	生活の技能	知識・理解
幼児に関心を持ち、幼児の遊びや家族とのかかわりについて考えている。	幼児の発達や生活について課題を見つけ、解決しようとする。幼児の発達や生活とのかかわりについて考えている。	幼児の発達や生活について理解し、基本的な接し方を身につけている。	幼児の遊びや家族の発達と家族のかかわりについて基礎的な知識を身につけている。

